View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by ICPBS Digital Cllections

国際仏教学大学院大学研究紀要
第 21 号（平成 29 年）

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXI, 2017

「陳那」の名称に関する考察

何　　歓　歓

「陳那」の名称に関する考察

何　歓歓

0. はじめに

中国仏教史において、「陳那」「域龍」「童授」「方象」という四つの名前は、いずれも五～六世紀の同一の仏教思想家ディグナーガを指している。前の三つは古くからの漢訳であり、「方象」は近代の研究者がチベット訳（Phyogs kyi glang po）から新たに意訳したものである。[1] 論師の名称と事跡にまとまった形で言及する最初期の作品に、玄奘（六〇〇／六〇二～六六四）が六四六年に完成した『大唐西域記』（以下『西域記』）がある。本稿では、玄奘と彼の弟子たちの文献を中心に、関連するテキストを踏まえながら、ディグナーガのインド原語と漢訳のもつ問題を解明したい。

1. 陳那、域龍、特那伽／陳那伽

「陳那」という名前は、真諦（四九九～五六九）訳『［無相］思塵論』と『解捲論』の著者として初めて登場する。玄奘訳『観所縁［縁］論』、義浄（六三五～七一三）訳『掌中論』および『観総相論頌』は、いずれも真諦訳に従い、「陳那」の呼称を採用した。

一方また、玄奘は『因明正理門論本』（以下『門論』）の著者名として、初めて「（大）域龍」という意訳語を当てた。これらは、中国仏教史においては周知の事実である。ただし、漢文仏典の中で、「域龍」という呼称例はかなり稀である。義浄訳『因明正理門論』（冒頭の一部分を除き玄奘訳『因明正理門論本』に一致）と施護（？～一〇一七）訳『仏母般若波羅蜜多円集要義論』は、いずれも著者名を「大域龍」と呼んでいる。なお、『因明入正理論疏』の中で基（六三二～六八二）は、「陳那」の呼称を七〇回以上

[1] 郭 1986, 141-143; 楊 1982, 8。

用いるのに対して、「（大）域龍」については、名称の意味を解説する時にのみ一回言及する。さらにまた、玄奘の弟子たちの注釈、たとえば円測作『解深密経疏』、太賢作『成唯識論学記』、遁倫作『瑜伽論記』のいずれにおいても、「陳那」の呼称のみが用いられた。[2]

これら漢訳名に相当するインド原名を分析・解釈する最初期のテキストに、玄奘の弟子神泰（七世紀）作の『理門論述記』があり、そこでは次のように解説される。

> 太（*大）域龍者，本音云「摩訶**特**地力反 **那**去声 **伽**」。摩訶此云大，特此云域，那伽此云龍。此菩薩如大方域之龍，有大威德，故以名焉。（T 44, 77 中）
>
> 「太（*大）域龍」というのは、元の発音では「摩訶特地力反那去声伽」と言う。「摩訶」はここで大きいことを言い、「特」はここで地域を言い、「那伽」はここで龍を言う。この菩薩は大きな地域の龍のように、大いなる威徳をもつので、［そのように］名づけられる。

この説は、中古漢字の字音に照らして示せば：摩訶（mau ha）＝mahā＝大、特地力反（diək＜dək）＝dig＝域、那去声伽（nà gĭɑ）＝nāga＝龍、という解釈にもとづく。[3]

冒頭の「摩訶」は、固有名詞の一部というよりは、「偉大な」の意味で添えられた敬称と考えられる。「域龍」の原語 Dignāga は dig と nāga によって構成される格限定複合語（Tatpuruṣa）である。それぞれの語につい

---

2 X 21, 369; X 50, 818; T 42, 411–412 参照。

3 中古漢字の字音表記については、最新の研究成果である王力の表記法に従う。李・周 1999 参照。B. Karlgren の表記では、摩＝mau、訶＝xa、特＝d^hək、那＝na であり、「伽」字に対する字音表記は見られない。Karlgren 1957 参照。Edwin G. Pulleyblank の表記では、摩＝ma、訶＝xa、特＝dək、那＝na' であり、「伽」字に対する字音表記は見られないが、迦＝kia/kai（transcription character for Sanskrit ka, kā）がある。Pulleyblank 1991 参照。なお、漢字古今音資料庫・小学堂文字学資料庫：http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw 参照。

ては、

［1］dig＜dik＜diś は名詞としての用例で、「方向」や「地域」の意味をもつ。二〇世紀前半の出版物の中では Diṅnāga の表記が比較的多く見られるが、[4]「特$_{地力反}$（diək＜dək）」との対応からも、玄奘や神泰が耳にしたインド語原名は Dignāga であった可能性が高い。

［2］nāga は蛇（とくにコブラ）あるいは人の顔と蛇の体をもつ半神半獣とされ、ときにまた象をもさす。それゆえ漢訳では一般に「龍」や「象」と訳される。鳩摩羅什（三四四～四一三）訳『大智度論』には次のような解説がある。

> 那伽，或名龍，或名象。是五千阿羅漢，諸無数阿羅漢中最大力，是以故言如龍如象。水行中龍力大，陸行中象力大。（T 25: 81 中）
>
> 「那伽」（nāga）とは、龍を表す、あるいは象を表す。この五千の阿羅漢は、無数の阿羅漢の中で最大の力をもつ。それゆえ、龍のように、象のようにと言う。水を行くものの中で龍の力は大きく、陸を行くものの中で象の力は大きい［のであるから］。

『大智度論』がここで言及する nāga をめぐる「龍」と「象」の両解釈については、上記の［1］と［2］の解釈に対応して、Nāgārjuna のチベット訳は一般に Klu sgrub であり、他方また Diṅnāga/Dignāga の場合は Phyogs（kyi）glang（po）と訳されるのが通例である。このように、チベットでも nāga は一般に klu（龍）あるいは glang po（象）と理解されている。ちなみに、先にふれた Phyogs kyi glang po の近代の意訳語である「方象」の例では、nāga＝glang po「象」の解釈に拠っている。

ところで、インドの詩人と劇作家である Kālidāsa 作 *Meghadūta* の第十四偈に、Diṅnāga の用例が見られ、そこではインド神話にもとづき、天の

---

[4] Shastri 1976, 1: “Both the forms ‘Dignāga’ and ‘Diṅnāga’ are correct. Although the latter is more in vogue amongst Sanskrit scholiasts, the form ‘Dignāga’ has been preferred being easy of pronunciation.”

［八］方それぞれを守る神**象**を意味する。同書の注釈 *Sañjīvinī* において、著者 Mallinātha（十四世紀）はこの Diṅnāga を仏教の因明論師と解釈する。Mallinātha による比定が適切かどうかは措くとしても、*Meghadūta* の用例を固有名詞としての Diṅnāga に関係づけるものとして興味深い。[5] 他方で、仏教の因明論師をさす呼称と確定されている Diṅnāga の用例は遅くとも八世紀の Jinendrabuddhi（710–770 頃[6]）著の *Viśālāmalavatī Pramāṇa-samuccayaṭīkā* に確認されている。[7] また、九～十世紀の Vācaspatimiśra が著した *Nyāyavārttikatātprayaṭīkā* では Diṅnāga の呼称は十例以上に及ぶ。[8] 一方また、十一世紀頃の Udayana の著作 *Nyāyavārttikatātparyapari-śuddhi* には仏教論師としての Dignāga の名称が六回現れる。[9]

しかしながら、『理門論述記』によれば、「陳那」の名称をめぐっては、一つの問題があったことが分かる。同時代である基、さらにまたその後の諸師は、「陳那」と「域龍」が同一人物を指すと理解しながら、「特地力反那去声伽」（diək nà gĭɑ）の音写語を結果として無視することになった。例外とも言えるのは、善珠（七二三～七九七）と神智從義（一〇四二～一〇九一）とである。それぞれの著作である『因明論疏明灯鈔』と『天台三大部補注』は、

> 言「域龍」者，若依梵音「摩訶陳那伽」，此云「大域龍」。（T 68, 203 中）[10]
>
> 域龍と言うのは、もしサンスクリット語音によるなら「摩訶陳那伽」であり、これは「大きな域龍」を表す。

---

5 Thomas 1918 参照。

6 Jinendrabuddhi の年代推定については、Steinkellner, Krasser, and Lasic 2005a, xxxviii–xlii 参照。

7 Steinkellner, Krasser, and Lasic 2005a, 1; Steinkellner, Krasser, and Lasic 2005b, 1 参照。

8 Tailaṅga 1898, 1, 97, 102, 120, 127, 129, 138, 189, 197, 199 参照。

9 Thakur 1996, 3, 183, 223, 226, 290, 295 参照。

10 基弁作『因明大疏融貫鈔』（T 69, 5 下）と蔵俊（一一〇四～一一八〇）作『因明大疏抄』（T 68, 437 上）に善珠の解釈が引用される。

陳那，具云「摩訶陳那迦」，此翻「大域龍」。（X 28, 428 上）
陳那とは、詳しくは「摩訶陳那迦」という。これは「大きな域龍」と意訳される。

という説明を「域龍」と「陳那」それぞれに加え、両者はともに、本来の語音が（Mahā-）Dignāga であるという認識に立っている。

しかしながら、以上の両者はむしろ例外とも言え、唐代の長安において支配的であった発音は、神泰が記録したように、「伽」の音を省いた「特那」（dɨək nà）あるいは「陳那」（ḍ̯ĭěn nà）[11]であったと考えられる。事実、『理門論述記』においても、「陳那」の呼称例が十三であるのに対して、「域龍」という意訳語は最初の一例のみである。中国人の人名の通例に照らして、姓は「陳」、名は「那」という理解（／誤解）にもとづいたこの名称は誰にも覚えやすく、このため新訳の「域龍」よりも広く受け入れられたという事情もあったであろう。

一方、師玄奘の『西域記』内の「陳那」に言及する箇所には、

山嶺有石窣堵波，**陳那**唐言［童？］授菩薩於此作因明論。（T 51, 930 中）
山嶺に石塔があり、**陳那**唐言［童？］授菩薩はここにおいて因明論を著された。

とある。小文字の「童？授」は「陳那」の意訳を示しているが、「域龍」の理解とは大きく異なっている。「陳那」は二つの原語や意味を持っていたのであろうか。以下では、この問題に目を向けたい。

まず、Stanislas Julien（一七九七～一八七三）は『西域記』をフランス語に翻訳した際、「陳那」の原語はサンスクリット語の*Jina と推定し、そ

11 王力の字音表記に従う。李・周 1999, 162, 180 参照。B. Karlgren の字音表記は、陳＝ḍ̯ʰi̯ĕn である。Karlgren 1957, 106–107 参照。Edwin G. Pulleyblank の表記は、陳＝drin である。Pulleyblank 1991, 52 参照。なお、漢字古今音資料庫・小学堂文字学資料庫：http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw 参照。

れゆえ「勝利」（victorieux）を意味するとした。同書はまた、「童授」の意味を「子供によって与えられた」（donné par un enfant）と解説し、その原語には*Kumāradattaを比定し、「陳那」とは意味も異なると付言した。[12]

Samuel Beal（一八二五～一八八九）の英訳『西域記』もまたJulienのJina原語説を踏襲し、「童授」との不一致については説明をなしていない。[13] さらにまた、日本語の音読みがJin'na/Chin'naであるためか、南条文雄と高楠順次郎もまたJina原語説を採用した。[14]

ちなみに、'Gos Lo tsā ba Chos grub（法成、八～九世紀）もまた、円測（Wōnch'ūk, 六一三～六九六）の『解深密経疏』をチベット語に翻訳した際、「陳那」を'Dzi naと音訳している。[15] 一方また、『西域記』を漢文からチベット語に翻訳したMgon po skyabs（十八世紀）は、「陳那」をDzin na da dha ste Rgyal bas byin（＝*Jinadatta, すなわち「勝者（＝仏）に授けられたもの」）と訳した。彼が利用した『西域記』のテキストには、おそらく「童」の文字はなく、「陳那唐言授」というテキストの中の「唐言」という二文字を省いて訳出したため、「陳那授」と読むことになり、その原語を*Jinadattaと想定した結果、このような音写語と意訳語とを当てたと考えられようか。[16]

その後、Thomas Watters（一八四〇～一九〇一）はJulien説の誤りを指摘したうえで、原語をDignāgaと推定した。[17] さらにまた、『門論』の「域龍」にも言及しながら、Tāranātha（一五七五～一六三四）が伝えた情報に基づいて、「Dignāga＝陳那＝域龍＝Phyogs kyi glang po」という当該論師の生涯を紹介し、学界に大きな影響を与えることになる。日本では、南条と高楠の誤りが堀謙徳によって訂正されるとともに、高桑駒吉、足立喜六、水谷真成は、善珠等の旧説に従い、「陳那」は「陳那伽」の略語であると

---

12 Julien 1858, vol. 2, 106, n. 2参照。

13 Beal 1906, vol. 2, 218参照。

14 Takakusu 1896参照。

15 van der Kuijp 2003, 422, n. 12参照。

16 Mgon po skyabs 1988, 1–10, 126b; 佐々木1988; 馬久＆阿才1984参照。

17 Watters 1905, vol. 2, 211参照。

する解釈で一致した。[18]宇井伯寿もまた「明治の中頃か、西洋の学者が陳那を Jina と還元したことがあって、南条目録等に採用せられた為に、最近に於て、之を誤として指摘する学者が海外に存するが、明治の終頃からは、正しく知られて居るので、かかるものを今更誤として、ことごとしく論ずるのは、已に常識的に時代錯誤である點で、默過すべきものである」と結論づけた。[19]しかし、ここには、未解決のいくつかの問題が残されている。とくに、宇井も論及していない「童授」という呼称の問題である。（この問題は次節で論じたい。）

一方また、『大唐西域記校注』の中で、季羨林他の編集者は、

> 梵文作 Dignāga，巴利文作 Dinna，俗語作 Diṇṇa，意譯域龍、大域龍。[20]

という注釈を加えている。サンスクリット語 Dignāga という語形がプラークリット語で Dinna/Diṇṇa となる可能性はあるが[21]、季羨林他が指摘したようなパーリ語 Dinna とプラークリット語 Diṇṇa はサンスクリット語 datta（ppp. of √dā）に相当し、直接にはいずれも「授け（/与え）られた」の意味をもつが、Diṅnāga/Dignāga との十全な意味対応を説明するのはむずかしい。[22]季羨林他の注釈に注目される点があるとすれば、「陳那」の原語としてサンスクリット語のみではなく、パーリ語を含むプラークリット語を挙げている点であろう。

真諦がインドから船で南京に到着した南北朝時代（五四八年）には、「陳那」の発音は ḍǐěn nà であったと推定される。ただし、その原語の理解に

---

18 堀 1912, 817–818; 高桑 1926, 152–155; 足立 1943, 824–827; 水谷 1971, 329–330 参照。

19 宇井 1958, 20 参照。

20 季 2004, 838 参照。

21 Dignāga＞Diṅnāga＞Dinnāga＞Dinnāg＞Dinnā＞Dinna というような音変化が想定されようか。

22 Edgerton 1953, 264; Davids & Stede 1997, 322 参照。

は以下のような三つの可能性が想定されるであろう。

[1] 第 1 は、真諦によって Diṅnāga の最後の母音（a）ないし音節（ga）が明瞭に発音されず、結果として中国人の「助訳」たちにより、最後の音節を適切に反映しない「陳那」という音訳が与えられたという可能性である。すなわち、Diṅnāga＞Diṅnāg＞Diṅnāk＞Diṅnā＞Diṅna/Dinna＞「陳那」の音訳が成立したという想定である（Cf. Nāgasena＝「那先」）。ただし、「特地力反那去声伽」（diək nà gĭɑ）の原音表記を伝える玄奘や弟子の神泰は、Diṅnāga より、むしろ Dignāga の呼称に馴染んでいたと考えられる。宇井伯寿もまた、「陳那は Diṅnāga の最後の母音の落ちて発音せられたものの音訳で、Dignāga とあるも同じである」との解釈を示す。[23]

[2] 第 2 は、Diṅnāga は最初に「陳那伽」と音訳され、中国語の「双音化」のルールにより、「陳那」と略されたという想定である。[24]

[3] 第 3 の可能性は、「陳那」は原音（俗語音）の Dinna や Diṇṇa から直接に音訳されたという想定で、この場合には音の欠落はないことになる。実際、六～七世紀頃のジャイナ学者 Siṁhasūri が著した *Nyāyāgamānusāriṇī Nayacakravṛtti* では、Dinnena（＝Dignāgena）という Dinna の具格形の用例も確認される。[25] さらにまた、同じジャイナの Haribhadrasūri（八世紀）著の *Anekāntajayapatākā* の自注には、Bhadanta-Dinna「大徳 Dinna（＝Dignāga）」の呼称例があり、[26] インドにおいても Dinna の呼称（／略称）で Diṅnāga/Dignāga が言及される例が確認されている。ただし、この場合の「陳那」（Dinna）の呼称には「地域／方向の龍／象」という意味が保持されている、あるいは保持されていないという二つの可能性がある。すなわち、前者はサンスクリット語 Diṅnāga/Dignāga がプラークリット語で Dinna/Diṇṇa と呼ばれ、表記されたと想定されうる場合であり、後者はプラークリット語 Dinna/

[23] 宇井 1958, 19 参照。

[24] 中国語の「雙音化」ルールについて、董 2011 参照。

[25] Jambuvijaya 1966, 96 参照。

[26] Kāpadīā 1940, 334; 石田 2005, 89 参照。

Diṇṇa がサンスクリット語 datta（ppp. of √dā）に相当すると理解される場合である。

以上の想定のいずれが事実であったにせよ、南北朝期の「陳」（ḍjěn）に相当する原音は diṅ/din/diṇ であっただろう。（一方また、「特」（diək）は多少なりとも唐代の発音を反映させた dig の音写語表記といえよう。）したがって、問題は、「那」に絞られることになる。以下では、［3］の Dinna/Diṇṇa の可能性について、『西域記』を中心に考察を加えてみたい。

2.「童授」成立の背景―授から童授へ or 授竜（→授童）から童授へ―

さて、先にも触れたように、「陳那」の別名として知られる「童授」は、前述の『西域記』に初めて言及され、四十年余り後に完成した『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』（六八八年）にもほぼ同じ内容の説明が見られる。

> 上有石窣堵波，是陳那唐言［童］授也，菩薩於此作因明論処。（T 50, 241 中）
>
> 上に石塔がある。これは**陳那**唐言［童］授**也**菩薩がここにおいて因明論を著された場所である。

しかしながら、『西域記』のいくつかのテキストを比較すると、この問題に関して、高麗蔵[27]には「童」の字がなく、「唐言授」の三つの小文字が二行に配置され、「授」の一文字のみが二行目に置かれている。大正蔵本も「唐言授」を校訂テキストとしたうえで、「（童）＋授＝宋、元、明、宮、乙」と注記する。他方で、季羨林他の『大唐西域記校注』は「唐言童授」を採用したが、その底本の『明治京大本』[28]は「石本宋本言字下並有

---

27 高麗蔵（初雕）は http://kb. sutra. re. kr 参照。

28「明治京大本」は新旧高麗蔵を底本として、東寺観音院蔵「宋本」、醍醐三寶院蔵「建本」、神田香岩蔵「大本」、石山寺蔵「石本」、富岡謙蔵校訂版「校本」を校勘するとともに、高麗蔵『慈恩伝』、興福寺蔵『慈恩伝』及び東大寺蔵『大方廣佛華厳経隨疏演繹鈔』、高麗蔵『新集藏経音義隨函錄』を参照し、知恩院蔵『大唐三蔵法師玄奘表啓』中の『進西域記表』も添付する。羽田・富岡 1911a, 28; 羽田・富

童字」（『考異』）と注記した上で、「石本宋本」以外の写本に従い、「唐言授」と校訂した。さらにまた、宋思渓蔵本を底本として呂澂が校訂した『西域記』、および『四部叢刊史部』、『清守山閣叢書』もまた「唐言童授」と伝える。[29]このように、近現代に出版された『西域記』の校訂本は、いずれも「唐言童授」というテキストを提示する。一方で、大正新脩大蔵経（SAT）を検索すると、善珠の『因明論疏明灯鈔』と江戸時代の法相学僧基弁（一七二二～一七九二年頃）の『因明大疏融貫鈔』にも『西域記』の「陳那唐言童授」という表記が引用されているが、大蔵経のテキストは後の校訂版本に拠るものであろう。[30]

これらの異同から推すと、「授」が本来のテキストであり、後に「授」の前に「童」の一文字が挿入されてしまったとの理解があったようである。また、「陳那」の音訳が成立した事情には前述のような三つの可能性が想定されるが、いずれの場合であれ、「陳那」に直接に対応する原音は Diṅna/Dinna/Diṇṇa と考えられ、「授」の訳はこれを反映しているが、「童」は音や意味上の対応も考えられない。

ちなみに、「童授」あるいは「童受」（「受」は「授」の同音対義語）の語に直接に対応するサンスクリット語は Kumāra-datta、Kumāra-labdha、Kumāra-lāta、Kumāra-rāta 等であろう。たとえば、『西域記』巻三「呾叉始羅國」には「昔経部拘摩羅邏多唐言童受」とあり、「拘摩羅邏多」（Kumāra-lāta/Kumāra-rāta）＝「童受」の対応を明示する。また、巻十二「朅盤陀國」によれば、「童受」は経部本師（＝譬喩師）であるとも言われる。[31]

しかしながら、このような「童授」＝Kumāra-lāta 等の対応は、当該の Diṅnāga/Dignāga の例では当たらない。ではなぜ、「陳那」が唐、つまり

岡 1911b, 108; 季 2004, 145–146 参照。

[29] 呂 1957, 16 参照。

[30] T 68, 207 上；T69, 5 下参照。

[31] 譬喩師としての「童受」については、Aśvaghoṣa 作の *Kalpanāmaṇḍitikā* に言及があり、Albert von Le Coq と Heinrich Lüders と Sylvain Lévi との間に議論がある。Lüders 1926; Lévi 1927 参照。

玄奘が「域龍」とも意訳した当時の中国で「童授」を意味するというような一見して不可解な解釈が定着したのであろうか。

この点は従来見過ごされてきたポイントであるが、もしも「童授」の中の「童」が、本来「竜」とあった文字の誤写であったとするなら、この問題は氷解することになる。誤写解釈の理由として、以下のような三点が想定されようか。

[1]「童」と「竜」は文字の形が似ていて、古音もまた近かったと推測される。（現代の北京語音はそれぞれ tóng と lóng）。遅くとも隋・開皇十七年（五九七）に彫られた石碑『隋董美人墓志』は、「龍」の省略形俗字として龍字を用いている。[32]

[2]「竜」は現代中国語（繁体字「龍」、簡体字「龙」）では用いられないが、日本語では「竜樹」「竜巻」など、すでに常用漢字となっている。（「竜」の略字は中国古代の書写本にも多くの用例があるが、ここでは紙幅の制約もあり、省略する。）

[3]「竜授」は、Diṅnāga/Dignāga の意味に対応する。つまり、Diṅnāga は*Diṅna-nāga の縮約形という理解からである。ただし、以上の解釈に従い、「竜授」が*Diṅna-nāga という理解に立った訳語であるとするなら、「竜授」よりはむしろ「授竜」の方が対応するであろう。この点で、興味深いことに、基弁の『因明大疏融貫鈔』には、「慈恩伝四曰陳那此云授童，西域記十曰陳那唐言童授」（T69, 5 下）とあり、少なくとも彼が手にした『慈恩伝』は「授童」の読みをもつことを明言している。

以上のように、『西域記』および『慈恩伝』では、「授」（Diṅna/Dinna/Diṇṇa）あるいは「授竜」（Diṅ[na]-nāga）が元来の漢訳であったと推定してよいであろう。

では、その後のテキストはなぜ「授」の前に「童」の字を置くに至ったのであろうか。あるいはまた、「授竜」はなぜ、授童からさらに「童授」

---

32 龍（竜）の音に関して、『説文解字』巻十二「龍部」は「龍，鱗蟲之長……従肉，飛之形，童省声」と解説する。孟 2012 参照。

へと倒置されることになったのであろうか。この問題を解く重要な鍵は、以下の『翻訳名義集』が述べるように、「童」を文殊師利童子に重ねて理解したという事情にあると考えられる。すなわち、宋・法雲（十二～十三世紀）は『翻訳名義集』の中で、

> 「陳那」,『西域記』云：唐言童授。妙吉祥菩薩指誨伝授。（T 54, 1066下）
> 「陳那」について、『西域記』は「唐に童授と言う」という。妙吉祥菩薩が指誨・伝授した［からである］。

と述べ、「妙吉祥菩薩」である文殊師利菩薩（文殊童子）が陳那に指誨し伝授したという伝説をもって「童授」の名を意味づけている。法雲の説明は『西域記』に記される伝説を受けたものである。『西域記』巻十は、陳那は敬意をもって妙吉祥菩薩の指導・教示（指誨）を受けた、という伝承を記している。

> 時，妙吉祥菩薩知而惜焉……陳那菩薩敬受指誨……（T51, 930下）
> 時に妙吉祥菩薩は［陳那菩薩が阿羅漢の無生果を得ようとしているのを］知って惜しみ、［大きな利益をなすために、『瑜伽師地論』を広めるよう忠告した。］……陳那菩薩は敬してその指誨を受入れ……

ここに出る文殊師利菩薩がディグナーガに教示したという話はチベットでもよく知られ、プトゥン『仏教史』やターラナータの『インド仏教史』にも見られる。[33]

ディグナーガと、文殊師利童子とも呼ばれる文殊菩薩に関する以上の伝承は、「童授」の呼称が「文殊童子の伝授」という意味を表すことを伝えるもので、法雲もまた、『西域記』を通して、この伝説に従ったと考えられる。

---

[33] Bu ston 1971, 847-850; Tāranātha 1986, 164-169 参照。

このように見ると、Diṅnāga/Dignāga＞Diṅna/Dinna/Diṇṇa＞Diṅ［na］/Din［na］-nāga＝「域竜（＝龍）」＞「授」＞「授竜」＞「授童」＞「童授」という呼称の変化も理解できるであろう。先に言及したように、「授」と「授竜」は、たとえ誤読あるいは誤解であったにせよ、インド語レヴェルの展開を反映した漢訳語と推定される。これに対して下線部で記した「授竜」から「授童」、さらに「童授」への移行は、誤写と伝承を契機に中国において辿った変容と考えられる。

インドにおいても、サンスクリット語 Diṅnāga/Dignāga は、しばしばプラークリット語で Dinna/Diṇṇa と発音され、先に挙げた複数のジャイナ教文献に確認されるように、元の意味を保持したままで、そのように表記されてもいた。しかしながら、この語は、結果として√dā の過去分詞の俗語形 Dinna/Diṇṇa と字音および表記が重なることもあって、後者の意味で解釈されて「授」と翻訳ないし誤訳されたと考えられる。この場合には Dinna/Diṇṇa＝「授」＞「授童」＞「童授」という変化も容易に説明されることになり、「童授」という一見して不可解な名称が生まれた背景を理解することができよう。

3. 結　語

以上、本稿では「陳那」という呼称の原語とその訳語（音写語と意訳語）の異同、ならびに訳語の変遷の跡を見た。これによって、Diṅnāga/Dignāga（地域／方位の龍／象）を意味する原語が、いくつかの想定される背景のもとに「陳那」という音写語、ならびに授や童授という意訳語で表記されるに至ったことが明らかとなった。その背景とは、

［1］サンスクリット語名の Diṅnāga/Dignāga が、ジャイナ教文献を中心に、しばしば Dinna/Diṇṇa というプラークリット語形で呼ばれるようになったこと。これによって、名称の原意（域龍）が必ずしも正確に伝わらず、後には√dā の過去分詞（datta）の俗語形（diṇṇa/dinna）であるとの解釈にもとづき、「授」という意訳を生んだと考えられる。

［2］後に、文殊師利童子による指導・教授という伝説に符合する形で、「授」の主語（／動作主）が付加され、「童授」という名称が特に宋代

以降の関連テキストとして採用されるに至った。

[3] 一方また、Diṅnāga が原語であり原音だという理解を前提にしながらも、おそらくは、[1] の経緯をも踏まえ、そこに na 音の重複が想定され、結果として*Diṅna/Dinna/Diṇṇa-nāga「授竜（龍）」の意味で解釈されたこと。インドの人名として*Diṅna/Dinna/Diṇṇa-nāga というのはやや奇妙であるが、この可能性は否定できないであろう。

[4] さらにまた、「竜」と「童」の誤写の影響もあって、「授童」と誤解されたとも考えられること。そして、結果として [2] のケースと同様に、文殊師利童子という主語が前置され、「童授」という倒置した名称が特に宋代以降の関連テキストとして採用されるに至った。

と想定されるものである。

略號と参考文献：

T 大正新修大蔵経

X 新纂大日本続蔵経（卍続蔵）

Beal 1906 Beal, Samuel. (Tr.) *Si-yu-ki: Buddhist Records of the Western World*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co. Lt.

Bu ston 1971
Bu ston Rin chen grub. *Bde bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod: Collected Works, Part 24*. New Delhi: International Academy of Indian Culture, 633–1055.

Edgerton 1953
Edgerton, Franklin. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, volume 2: Dictionary*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.

Davids & Stede 1997
Davids, Rhys. and Stede, William. *Pali-English Dictionary*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.

Julien 1858

Julien, Stanislas. (Tr.) *Mémoires sur les contrées occidentales*. Paris: L'Imprimerie impérial.

Jambuvijaya 1966

Jambuvijaya. (Ed.) *Dvādaśāra-Nayacakra* (*Mallavādi*). *Ed. together with Nyāyāgamānusāriṇī Nayacakravṛtti*. Bhavnagar: Śrījaina-ātmānaṃdasabhā.

Karlgren 1957

Karlgren, Bernhard. *Grammata Serica Recensa*. Stockholm: The Museum of Far Eastern Antiquities.

Kāpadīā 1940

Kāpadīā, Hirālāl Rasikdās, (Ed.) *Anekāntajayapatākā by Haribhadra Sūri: with his own commentary and Municandra Sūri's supercommentary,* vol. I. Baroda: Oriental Institute.

Lévi 1927

Lévi, Sylvain. La Dṛṣṭāntapaṅkti et son auteur. *Journal asiatique,* vol. X, 95.

Lüders 1926

Lüders, Heinrich. *Bruchstücke der Kalpanāmanditikā des Kumāralāta*. Leipzig: F. A. Brockhaus.

Mgon po skyab 1988

Mgon po skyabs. *Chen po thang gur dus kyi rgya gar gi zhing bkod pa'i dkar chag*. Kyoto: Rinsen Book Co.

Pulleyblank 1991

Edwin G. Pulleyblank. *Lexicon of Reconstructed Pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*. Vancouver: UBC Press.

Shastri 1976

Shastri, Dharmendra Nath. *The Philosophy of Nyāya-Vaiśesika and its Conflict with the Buddhist Dignāga School*. Delhi: Bharatiya Vidya Prakashan. (First published in 1964).

Steinkellner, Krasser, and Lasic 2005a

Steinkellner, Ernst & Krasser, Helmut & Lasic, Horst. *Jinendrabuddhi's Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā* (Chapter 1, Part I: Critical Edition). China Tibetology Publishing House, and Austrian Academy of Sciences Press.

Steinkellner, Krasser, and Lasic 2005b

Steinkellner, Ernst & Krasser, Helmut & Lasic, Horst. *Jinendrabuddhi's Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā* (Chapter 1, Part II: Diplomatic Edition). China Tibetology Publishing House, and Austrian Academy of Sciences Press.

Takakusu 1896

Takakusu, Junjirō 高楠順次郎. (Tr.) *A Record of the Buddhist Religion as Practiced in India and the Malay Archipelago*. Oxford: Clarendon Press.

Tailaṅga 1898

Gaṅgādhara Śāstrī Tailaṅga. *Nyāyavārttikatātparyaṭīkā of Vācaspatimiśra*. Benares: E. J. Lazarus.

Tāranātha 1986

Tāranātha. *Rgya gar chos 'byung*. Chengdu: Sichuan minzu chubanshe 四川民族出版社.

Thakur 1996

Anantalal Thakur. *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi of Udayanācārya*. New Delhi: Indian Council of Philosophical Research.

Thomas 1918

Thomas, Frederick William. *Meghaduta,* v. 14. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain & Ireland* (New Series), vol. 50, 118–122.

van der Kuijp 2003

van der Kuijp, Leonard. A Treatise on Buddhist Epistemology

and Logic Attributed to Klong chen Rab 'byams pa (1309–1364) and Its Place in Indo-Tibetan Intellectual History. *Journal of Indian Philosophy,* 31, 381–437.

Watters 1905
Watters, Thomas. (Tr.) *On Yuan Chwang's Travels in India.* London: Royal Asiatic Society.

足立 1943　足立喜六『大唐西域記の研究』京都：法蔵館。

石田 2005　石田尚敬「〈他の排除（anyāpoha）〉の分類について」『インド哲学仏教学研究』12, 86–100。

宇井 1958　宇井伯寿『陳那著作の研究』東京：岩波書店。（1979 年第二刷）

佐々木 1988
佐々木教悟「チベット訳『大唐西域記』について―『西蔵文献目録』No. 12459―」*Chen po thang gur dus kyi rgya gar gi zhing bkod pa'i dkar chag.* Kyoto: Rinsen Book Co., 1–10.

高桑 1926　高桑駒吉『東南印度諸國の研究』東京：森江書店。

羽田・富岡 1911a
羽田亨・富岡謙藏『大唐西域記』京都帝國大學文科大學叢書、第壱種。

羽田・富岡 1911b
羽田亨・富岡謙藏『大唐西域記考異索引』京都帝國大學文科大學叢書、第壱種。

堀 1912　堀謙徳『解説西域記』東京：文榮閣。

水谷 1971　水谷真成『大唐西域記』東京：平凡社。

董 2011　董秀芳《詞彙化：漢語雙音詞的衍生和發展（修訂本）》北京：商務印書館。

郭 1986　郭和卿（訳）《佛教史大寶藏論》北京：民族出版社。

季 2004　季羨林等《大唐西域記校注》北京：中華書局。

李・周 1999
李珍華・周長楫（編撰）《漢字古今音表》（修訂本）北京：中華書局。

呂 1957　呂澂（校訂）《西域記》南京：金陵刻經處。

馬久＆阿才 1984
馬久、阿才《〈大唐西域記〉藏譯本校勘》《世界宗教研究》3, 1–34。

孟 2012　孟蓬生《“竜”字音釋——談魚通轉例說之八》http://www.gwz.fudan.edu.cn/SrcShow.asp?Src_ID=1956。

楊 1982　楊化群《集量論略解序・集量論略解》北京：中國社會科學出版社。

Summary

On Dignāga's Names

HE Huanhuan

Over the last one hundred years or so, the numerous studies of Dignāga's (ca. 480–540) thought, especially his logic and epistemology, have greatly improved our understanding of Buddhist and non-Buddhist Indian intellectual history. Using his Sanskrit name Dignāga or Diṅnāga and its Tibetan translation of Phyogs [kyi] glang [po], many of his theories were carefully studied by scholars all over the world.

Dignāga was also well known to Chinese Buddhism. In fact, there are no less than four different Chinese renditions of his name, i.e. Chén nà 陳那, Yù lóng 域龍, Tóng shòu 童授, and Fāng xiàng 方象. The first three are considered to be reflexes of Sanskrit, but they are not unproblematic in every instance. The last one has gained currency since pre-modern China and is simply based on the Tibetan name for him. One of the earliest records of Dignāga's names and life is found in the *Datang xiyuji* 大唐西域記, *Record of the Western Regions*, which Xuanzang 玄奘 completed in 646.

I begin my discussion with an analysis of the names of Dignāga as found in the writings of Xuanzang and his disciples. Having done that, I then take a close look at all the relevant Sanskrit, Chinese and Tibetan sources that have something to say about his names. In so doing, I clarify the meaning of each different name with their probable original counterparts and how they are related to one another. Finally, I point out how and why "Dignāga" received four different Chinese reflexes and consider these in light of the Chinese understanding and misunderstanding of Sanskrit and Indian Buddhism.

Professor,
Zhejiang University
International Research Fellow,
Japan Society for the Promotion of Science
Commissioned Research Fellow of 2016,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies